

第9回 ふくまる夢たまごセミナー

日時 12月7日（金曜日）18時～20時

場所 市庁舎7階 大会議室

内容 先輩に学ぼう PART 2

講話「わたしの授業づくり」

講師：山下 純子 先生（池田市立呉服小学校教諭）

村上 洋平 先生（池田市立石橋中学校教諭）

戒能 千恵 先生（池田市教育委員会指導主事）

今回の「ふくまる夢たまごセミナー」は、前回に引き続き「先輩に学ぼう PART 2」。テーマは「わたしの授業づくり」です。

学期末の忙しい中、呉服小学校から山下純子先生、石橋中学校から村上洋平先生にお越しいただくとともに、教育政策課の戒能千恵指導主事も加わり、3人の先生方に「授業づくり」についてお話をしていただきました。

山下先生は、社会人を経て、教職12年目の中堅教師で、現在、呉服小学校で6年生を担当されています。自己紹介の後、4月の授業参観で算数の授業を見た保護者からの「なんで1時間に1問の問題しか解かないのか」という感想が紹介されました。その時は返答に困ったようですが、今では、問題解決に向かう過程（考える過程）を大事にした授業であったことを振り返られていました。

山下先生は、授業づくりで大事にしていることを、「教材研究」と「子どもの見とり（子ども理解）」であると考えており、次のように話されました。

<教材研究>

○何のためにするのか。

○特に算数の授業では ①教科書・指導書・研究書を有効活用する。②本時の「まとめ」から逆算し、「めあて」を考えていくようにする。③板書計画は指導計画につながる。

<子どもの見とり（子ども理解）>

○子どもの実態から授業計画を立てる。

○授業は生き物である。授業中であっても子どもの実態にそぐわないと判断



すれば、思い切って授業計画を変更したり、授業を打ち切ることがあってもいいのではないか。

さらに、多くの人の授業を見ることや自分の授業を客観的に見てもらうこと、できるだけ研究会に参加することなど、授業づくりに向けての自己啓発にも触れられました。

最後に、「教師が教える授業ではなく。子どもが考える授業をめざしたい」とお話を締めくくられました。



続いて、石橋中学校から来ていただいた村上洋平先生の講話へと移りました。村上先生は、理科の先生で1年生を担当されています。教職7年目の元気な先生です。



自己紹介の後、村上先生は塾生のみなさんに「勉強ができない子がいたらどんな授業をしますか」と問いかけられました。先生自身が教員採用試験の面接で聞かれた質問だったそうです。そこから、なぜ授業に参加できない（寝る、教室を出る、休む等）生徒がいるのかを塾生のみなさんとともに考えていきました。生徒の生活体験等を考慮した発問や問いかけをするなど、先の山下先生同様、子どもの実態に応じた授業づくりをしていくことの重要性につながっていきました。

また、村上先生は、日々、子どもたちが投げかけてくる「なぜ勉強をするんですか？」という質問について塾生同士話し合わせ、勉強することの意味をそれぞれ発表させていきました。そして、塾生に迫力満点のスターウォーズ（宇宙空間での戦闘シーン）の映像を見せ、「この映像でおかしいところはどこですか？」と問いました。当然、迫力ある爆発音は聞こえないはずですが、ここから、村上先生は、「知識を得ることで、多角的な考え方ができるようになること」＝「勉強することの意味」であることを話されました。「おかしい」と言えるためには、使わないであろう知識の習得も大事であること、物事の本質を見抜くための「生きる力」は「おかしい」と言える力を身につけること、こんな授業づくりをめざしている村上先生でした。

勉強が苦手な子は、様々な環境（家庭、精神、身体、人間関係 等々）を背



負って教室にいます。それを分かるのは先生です。

「先生はあなたしかいない」 村上先生の締めくくりの言葉でした。

戒能指導主事からは、小学校の音楽専科としての経験から、音楽の授業づくりについて話していただきました。



まず、音楽科の特性から、音楽授業に「壁（＝苦手意識）」を作っている子どもたちの話がありました。それは、「楽譜が読めない」ことであったり、「ピアノ（楽器）が弾けない」ことであったり、「人前で歌ったり演奏することが苦手」であったりすることの抵抗感を抱えながら授業に臨んでいる子どもたちが少なからずいるのではないかというものでした。

こうした子どもたちの実態から、戒能先生の授業づくりの大前提は、音楽の授業は、音楽家をめざすためのものではなく、仲間とともに音楽を楽しみ、音楽を作り上げていく喜びを感じ取らせる場としたいというものでした。

また、ご自身の授業を振り返りながら、授業が思うようにならなかった時の要因を次のように分析されていました。

- ①発問や指示が曖昧だった
- ②授業時間内に活動を詰め込みすぎた
- ③時間やペース配分のまずさ
- ④指導者（自身）と子どもの実態との乖離 等々

こうした経験から、「子どもから学ぶ（子どもに任せてみる）」ことと「担任から学ぶ（担任との意見交換、担任の指導方法を知る 等々）」ことがいかに重要であるかを感じたそうです。

さらに、他教科同様、授業づくりの基盤は教材研究であることについても触れられました。なかでも、風の音、落ち葉を踏みしめる音、木の葉がこすれ合う音など、自然の中から音をみつけ、それを音楽の創作に生かそうとする作曲家：坂本龍一氏の音楽づくりの様子を映し出した映像を見て、音楽の素材は日常生活のいたる所に存在していることを塾生のみなさんとともに感じる事ができ、音楽の新たな一面を見たような気がしました。



最後に、6年間の子どもの成長を客観的に見ることのできる喜びや、学年の枠を超え、学校全体を見通すことができたという、音楽専科ならではの「やりがい」と責任の大きさについて話され、締めくくられました。

この後、いつものようにグループ協議が行われました。前回のセミナー（「学級・集団づくり」）同様、授業づくりにおいても子どもを知ること、子どもの実態を把握すること、いわゆる「子ども理解」の重要性が活発に話し合われていました。



< 塾生の感想から >

○ 授業づくりについて、3人の先生方にお話をうかがうことができました。子どもの実態に合わせた授業づくりという点では、学力の低い子もしっかり見てあげるということを学びました。どうしても理解力があり、発表をしてくれるような子に視点が向きがちですが、そこをどのようにアレンジしていくか、学級づくりと絡めて教えていきたいと思いました。

また、素材集め、指導書や教科書を読むことでできる教材研究もしっかり行っていかなければならないと、改めて思いました。「これぐらいわかるやろ」は危険という言葉もありましたが、思わぬところから出る疑問や「苦手」にどう対処するか、間違っていることは「ごめん」とちゃんと謝りながら教え、子どもとともに学んでいく教師になりたいと思いました。

- 授業づくりにおいて大切なのは、「教師の理想と子どもの実態のギャップを教師が埋める努力をする」ことだと思いました。もし学習塾であれば、教える側の理想どおりの授業をすることが許されるかもしれませんが、公立の学校で教えるには、子どもの実態に教師があわせて、全員が参加できるようにすることが必要です。そのためには、前回のセミナーで学んだ学級経営や、子どもたちの実態に臨機応変に合わせられるだけの教材研究をすることが大切だと思いました。

- 授業づくりの中心にいるのは、やはり子どもたちだと思った。限られた時間の中で教えなければならないと思うと、効率的に授業をしたかどうかで終わりのように感じてしまう。しかし、それは教師の都合であって、子どもたちが本当に理解できているのかどうか分からない。限られた時間の中で子どもたちがちゃんと学ぶことができるように教材研究を行っていかなければならないと思った。授業をしたから終了ではなく、その後の振り返り、反省こそが最も大切だと感じた。

- 今日の講義で「授業は生き物」という言葉がとても印象的でした。私自身、子どもの発言に返す言葉が見つからず、思わず、「誰か分かる？」と聞いたことがありました。そのエピソードを思い出しながら共感していました。教材研究については、本や教科書だけでなく、日常の中からも拾ってきて授業に活かすことができるのだと思いました。素材を探して子どもたちに提供し、子どもと一緒に楽しむのも授業で大切なことだと感じました。
「授業づくりは楽しみづくり」という言葉に共通していると思いました。